

小腸透視にて確認しえた大複殖門条虫の人体寄生例

山本 真志, 今岡 誠, 松本 慶蔵

長崎大学熱帯医学研究所臨床部門

中島 康雄

長崎大学熱帯医学研究所寄生虫学部門

A Case of Human *Diplogonoporus grandis* Infection Detected Radiologically

Masashi YAMAMOTO, Makoto IMAOKA and Keizo MATSUMOTO (Department of Internal Medicine, Institute for Tropical Medicine, Nagasaki University)

Yasuo NAKAJIMA (Department of Parasitology, Institute for Tropical Medicine, Nagasaki University)

Abstract : The 59th case of human *Diplogonoporus grandis* infection in Japan was presented in this paper. The fragmented strobila of the tapeworm was spontaneously discharged from a 45-year-old male living in Nagasaki Prefecture. This tapeworm was shown on X-ray films of bowel series as presented in Photo. 1. Degenerated proglottides of the worm were found in the stool in the course of bithionol treatment, the scolex being not identified due to the degeneration. After the treatment the worm was not detected radiologically, and also repeated stool examinations were negative. It indicated the therapeutic effect of bithionol on this tapeworm. The morphological characteristics of this tapeworm were similar to those previously reported on 58 cases. The discharged eggs before treatment seemed to be matured, because the morphology of the eggs was identical with that reported by previous authors. Horizontal, transverse and sagittal sections of the strobilae failed to reveal the details of the genital organs.

Tropical Medicine, 18(4), 179-182, December, 1976

はじめに

大複殖門条虫の我国における人体寄生例は、1892年に中村が長崎県高島炭鉱勤務の28才の男性より得た虫体を飯島、栗本(1894)が最初に記載して以来、現在までに58例の報告がなされている。これらの中には肉眼的に生殖器を確認しえず、一見広節裂頭条虫などと誤認され易い小型の未熟虫体の数例も含まれているが、我々は最近長崎市在住の45才の男性に、片節の自然排

出と便中に虫卵を認め、かつ小腸透視にて腸管内に虫体の存在を確認しえた、成熟せる大複殖門条虫の1例を経験したので、その虫体の特徴を記載し、日本における59例目として報告する。

症 例

患 者: 針○義○, 男, 45才。

現住所: 長崎市。職業: 魚市場勤務。

住所歴：五島福江市にて成長。

嗜好：青魚（アジ，サバ）の刺身を好む。

主訴：下痢。

現病歴：昭和50年6月初めより下痢便2週経過後、虫体一部排出。

既応歴：2年前より下口唇の腫脹。

現症：赤血球 515万，血色素 15.5g/dl，血球容積 46.0%，白血球 5400，血清総蛋白 7.0g/dl，GOT 22，GPT 31，Al-P 6.6，LDH 326，総ビリルビン 1.3，好酸球 7%，便中虫卵（卅），便潜血（-）。

臨床経過

図1は本症例の臨床経過の概略である。入院時より唯一の自覚症状であった下痢は，5日目で消失したが，7月1日に施行した小腸透視にて虫体陰影が確認され，その翌日よりBithionol 2gの隔日3回投与を開始し，投与終了翌々日より3日間に亘り，破壊された体節が糞便と共に排出され，7月17日に施行した2回目の小腸透視では虫体陰影の消失を確認した。好酸球に著変なく，肝機能，血液像にも駆虫剤投与前後で異常は認められなかった。駆虫剤投与前に施行した小腸透視では，圧迫により空腸末端部より幅約17mmの带状の条虫による陰影欠損像が認められた（写真1）。

虫体及び虫卵の観察所見

自然排出された体節及び虫卵の計測を行ったが，従来の報告とほぼ同値あった（表1）。自然排出された片節の全長は約90cmで，頭節，頸部は認められず，最大幅は25mm，最小幅は17mmであった。生鮮標本で2組の生殖器を肉眼的に明瞭に確認できた（写真2）。成熟体節は横幅17~25mm縦径1.0mm前後で，その前後は鋸歯状を呈し，各体節に明瞭な2個の子宮が認められた。標本作製の困難より，卵巣，輸卵管，精巣等の位置関係を明らかにできなかった（写真3，4）。虫卵の平均横径は45 μ (38~60 μ)，平均縦径は63 μ (50~75 μ)で，卵の前極に小蓋があり，後極の卵殻に小結節が認められた（写真5）。

考察

我国において，大複殖門条虫の人体寄生例は，現在まで58例が報告されている。疫学的にみると，第1例が長崎で報告されて以来，九州各県及び鳥取などで報告されているが，1972年，1974年熱帯医学研究所の坂口等によって報告されている様に長崎県からの報告が目立っている。（森下，1960；加茂ら，1970；坂口ら，1972；坂口ら，1974）。またこれらの県はいずれも海に面している。なおその発育史，ヒトへの感染経路に

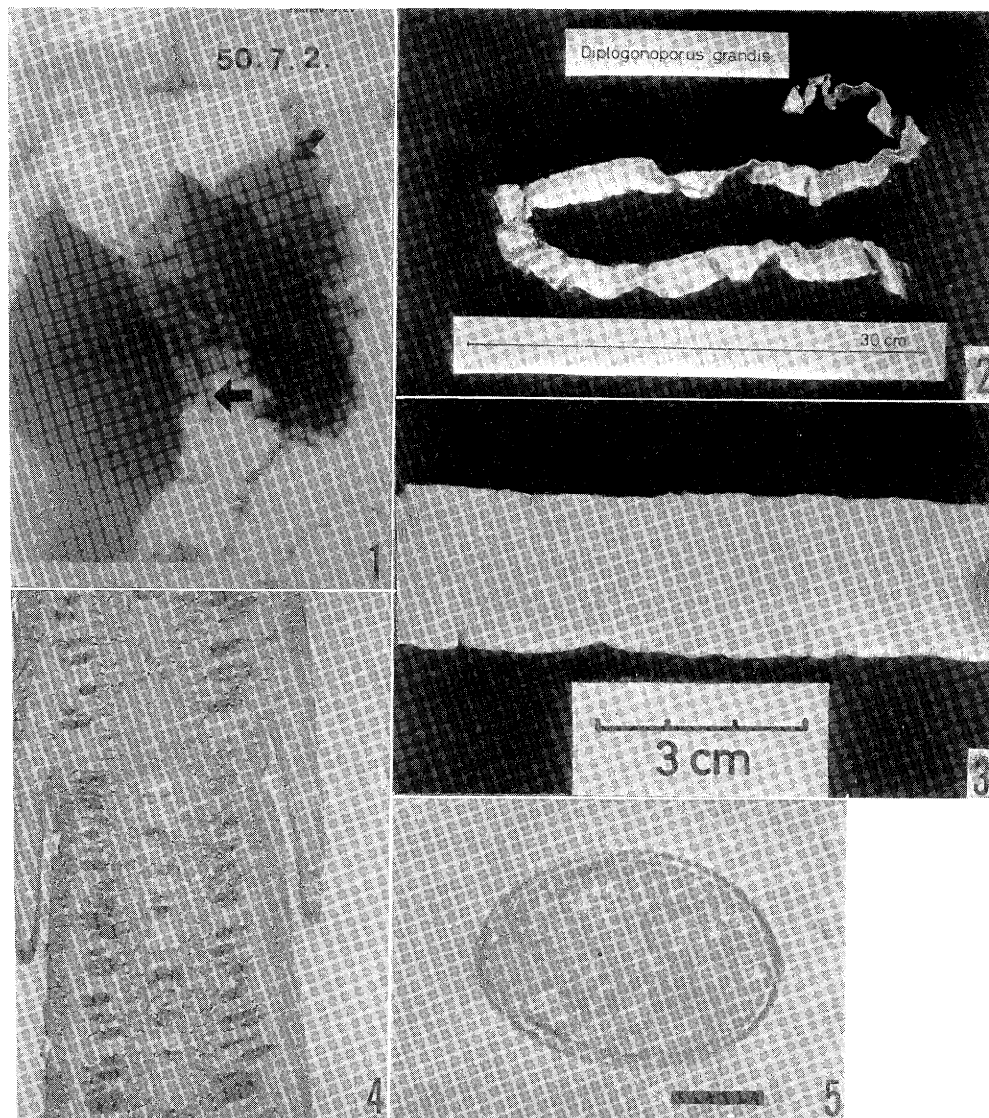
Date	26/6'75	1/7	5	10	15	20	26
Sym	Diarrhea						
	* Discharge of parasite *						
	Bithionol 2g			Kamala 15g			
WBC	5400		5600				5300
Eosi	7%		5%				8%
RBC	515 $\times 10^4$		536 $\times 10^4$				539 $\times 10^4$
Hgb	15.5		15.9				15.8
Hct	46.0		47.2				47.2
T-p	7.0						6.7
GOT	24		22				16
GPT	2		31				30
Al-p	6.6						6.4
LDH	326						251
T-bi	1.3		1.4				0.9
D-bi	0.7		0.6				0.6

* X-ray film of bowel series

Fig. 1. Clinical course of the case, 45-year-old male with *D. grandis* infection. Note no significant changes in the laboratory findings before and after treatment.

については未だ明らかでなく、最近ようやく、加茂等 (1969) によって、実験的に *Oithona nana* への感染が確認され、第1中間宿主となり得る事が証明されたに過ぎない。なお本症例の青魚生食の習慣は注目に値する。

本症例は Bithionol 投与前に、小腸透視にて虫体を確認し、投与後虫体の排出をみた。文献的に読みえた範囲では、本症例が最初の小腸透視による大複殖門条虫虫体確認症例である。なお今日までの経過観察では、駆虫剤による副作用は認められず、その後虫体及び虫



- Photo. 1. X-ray film of intestinal series.
Note the filling defect due to the strobila (arrows).
- Photo. 2. "Spontaneously-passed" strobila about 90 cm long.
- Photo. 3. Matured proglottides from the posterior part of the strobila. Note two uterine fields in the characteristic short, broad proglottides.
- Photo. 4. Horizontal section from the posterior part of the strobila.
- Photo. 5. Ovum with an operculum at one end and a small knob-like thickening at the other. (Scale: 20μ).

Table 1. Measurements of specimens*

		mean	range
Proglottis**	length		0.5 - 1.0mm
	breadth		17 - 25mm
Egg	length	63 μ	50 - 75 μ
	breadth	45 μ	38 - 60 μ

* Scolex was not identified.

** Proglottides were measured on only "spontaneously passed" strobila about 90cm long.

卵の排泄はみられていないので、完全駆虫されたものと思われ、大複殖門条虫症に Bithionol が有効であることが明らかとなった。

結 論

本邦59例目の大複殖門条虫症の症例を報告した。患

者は長崎市在住の45才の男で、片節と虫卵を自然排出した。小腸透視にて虫体の存在を確認出来た。虫体の形態学的検索、虫卵の計測より、本症例の虫体は成熟体節を有したと考えられる。また Bithionol が本症に対し有効であることが明らかにされた。

文 献

- 1) 森下 薫 (1960) : 大複殖門条虫, 日本に於ける寄生虫学の研究 II, 323-346, 目黒寄生虫館, 東京
- 2) 加茂 甫 (1969) : 大複殖門条虫に関する研究, 寄生虫誌, 18 (4), 333-337.
- 3) 加茂 甫, 初鹿 了, 岩宮 緑, 木下大吉 (1970) : 山陰地方に於ける大複殖門条虫寄生の第9例, 寄生虫誌, 19 (1), 15-24.
- 4) 坂口祐二, 岩本 功, 村上文也, 牟田直矢 (1972) : 大複殖門条虫寄生の3例, 熱帯医学, 14 (1), 10-17.
- 5) 坂口祐二, 野島尚武, 堤 恒雄, 中富昌夫, 中島正敏 (1974) : 大複殖門条虫の人体寄生例追加, 熱帯医学, 16 (1), 27-33.